逸雲浪夢の嵐

坤

柳田文庫
文庫11
A 272
2

未松謙澄閲

中島 蒿著

東天に輝く日の丸は
大君の御旗
西南に閃く星影は
荒男の現魄

遊魂之夜嵐

東京

金港堂梓

48-7841

六段目　二婦旅中之相談　人　鼻飛之述懐　三人上戸の場

春景色。止も霞の帯ためて。のらるる雪の薄化粧。色も
香もあるみそ櫻。年も三十路を二つ三つ。こえる野道
を杖つきの。乃の字も今も卸のうへを。つくづくすぐる
旅の空。こゝは西郷隆盛ガ妻の定子と夫の氣。汲でお
はしも古里へ。かりの子られや鴛鴦の。はるれかねた
るうろをおめひやりつゝ忠作が。膝を屈めてた
りまをう。こゝまをし奥さま。アノ茶店も赤鹿さうな。
さんまあそばせと。主従心あひをいの松ゆえ

A272
2

六段目　二婦旅中之相談　一人鼻飛之述懐　三人上戸の場

春景色。山も霞の帯ゑめて。のられる雪の薄化粧。色も香もあるおそ櫻。年そ三十路を二つ三つ。こえる野道を杖つきの。乃の字も今を身のうへを。つくづくすぐる旅の空。そこよ西郷隆盛が妻の定子を夫の氣。汲でゐばしを古里へ。かりのそらねをおもひやりつゝ忠作が。腰を屈めてたちどまり。ヲヽコレまをし奥さまゞ。アノ茶店を奇麗さうな。ぎんぢ御休息あそばせと。主従心あひをいの。松のお

帝国大学文庫

松譽澄閑　中島蒿蹊著　近世畸人傳　浪華遊客夜嵐

東京帝国大学文学部蔵書
大君の御旗の光
西南の内乱は星霜を
荒男の視聴に

さなる腰懸よ。腰打懸て休へり。かくるところへ向よ
り。篠原國幹ゲ妻松ケ枝。馴ぬ旅路に姑の。隠居館をた
づねんと。供を引連来かゝれむ。夫とみるより定子ハ
らゐかけ。それへおいでであるか松ケ枝さまでハござりませぬう。ヤサウおつしやるは西
郷さまのおかもじ。定子こゝでハござりませぬう。ヤ
コレぐめづらしきところみておめよかゝりまし。ま
づ〳〵これへおとをりくださりませと。すゝめられ
て松ケ枝そ。ゐーやく〳〵なごらうちとをれバ。定子そ
いきをあらためて。まづもつて

んよお約束もせぬ旅路よて。お目ふかゝるそごえんの
ふゝきことでがあ・ござりまし よふ。こゝを往来人ぎ
ゝをもゞかりますれど。むゝふゝみゆる別荘へうつ
り。ゆる〳〵おはあ〳〵まをしまし やう。さやうあれば
定子さま。まづ〳〵松ケ枝さま。いざまづ定子さま。さ
やうふれむごめんあそばせと。定子がたてゝ松ケ枝
も。あとよひつそひたとやうよ。別荘さ〳〵ていでゝゆ
く。あとは忠義の忠作と。下郎の團六ゆろともよ。酒の
肴も蕃椒。奴豆腐よやつこらせ。鼻謡まぎりのそのと
ころへ。来かゝるものを。名にしおう。人よろられし鼻

飛苦平。あたゝ ニヤ ひとりごと。腰打懸てやをらつゝ。
それとみるより両人を。盃とりて鼻飛がまへゝさ〳〵
だし。コレ當時ハ萬國交際とやら。こふさんもぞいぶ
んお通人とみうけまし よと。廓のはふしうけたまゝり
たし。まづ〳〵ひとりあげまし よと。盃させむ鼻飛を。
鼻よ手をあてゝおく〳〵泣。コレ〳〵はなをかみぐるしき
この鼻飛へ。お盃をくゞさるとを。かさ下けあふござ
りまするれど廓のはふ〳〵とおつちやるを。私の鼻のな
きゆゑよ。もし傾城のためよをとしさうとのおうせ
ぐひ。そのやうあうたきふ鼻とおみさてを。おふさけ

をぎてあさけないと。ろくとばろりよ泣出せを。圍六
をうちろろひ。ハヽヽ奇妙ざ呑るえ。ぐにと打笑ぐ忠作え
きぶ〳〵顔。コリヤ圍六ナゼ人の顔をみてそのやうよろ
らうのじや。エ、きうれいきごくか奴じやかいう。おり
や年こそよれど俠客弱もの へをなさけをかけ。まさ
強奴へをどこまでもむかふのじや。一躰まあけたい
のろるいを圍六が面構。あれかど鼻無さんがなげく
のをろふとも。あゝなんのこうちやいをりや腹が
たつて〳〵。腸が煮かくるよい。ハヽヽこりやをらしい。
ハヽヽ忠作爺いをなんのことざ。人の疝氣を頭痛とや
ら。腹立るよもことによるよい。ハヽヽものをきよもほん
どがあるよい。ハヽヽコレ〳〵鼻のは通人。その爺さゐのきぶ
〳〵顔のなをるやうよ。おまくの鼻のはあゝきてく
ざさんせと。ろうひあがらよろひかくれで。忠作も面
赤らめ。こあさんも生おがらの鼻あゝでもあるまい。
鼻欠ばあゝもまゝ一興。はあゝてきろせ。サヽどつぐく
ナンジヤ身どもよ鼻飛のはあゝをせい。ヲヽはあさうろも
〳〵。まづ鼻飛のいちらくを。ろうしも春の花盛。うも
きあ蝶ハ花の香を。きゝふ弥生の花曇。在呼の者よさ
そそれて。花見でぶちのはあやりよ。鼻頭色手拭へ。紅

のついさを自慢して。鼻毛をのぞんそのをりから。花火よにくるあときいて。こそおにぐ〳〵あやしむうち。花は嵐のごとくにて。鉄砲玉の雨霰。こそたまらぬと花莚遊を。巻てだくやうにぐやう。花をうしろよ鼻頭のむいくるまゝよぞとにげかくる。途中よごうとなさけなや。この鼻飛の鼻頭へ鉄砲あがさんできて。ハッーいうまもあらばこそ。先祖代〳〵親譲。膨脖て高い上等の。鼻をぐくう駈落し。鼻の痕うら迸出さ。鼻血が八升八合八夕。甚こまるそのところへ。家よ残し花嫁を。花見もどりのおそひをあんじ。下駄の鼻緒のきれさまい。たづねてきさえよけれども。この鼻飛が鼻をみて。恟うそのまゝ鼻つまりはてさう。おりひまをせなにおど。二人とおい花嫁よ。死別しも鼻のゆゑ。鼻の飛ぶそのりとを。みお西郷のちらざぞと。鼻よ手をあて鼻水を。啜あげくうみあき。鼾鼾つまるばうりあり。忠作を膝をなをし。コリヤ鼻飛とやら今の一言きゝづてあらぬ。そあさの鼻の飛ざのが。西郷のちらざとを。なんぞ証據のあらてのことろ。胡乱なことあら鼻飛とをいそさぬと。柄よ手をうけつめかくれだ。園六をうちひ。ハヽ

こりや忠作あんのことじ
もやい。滝のぬけぬ男じや。今のをほんのはあしご
い顔をして。年がひもあいたくふめやいの。ハヽヽコレく
鼻飛さん。こゝかまそずとかくらんせ。ハヽヽとうらふ
圍六腹立忠作。コリヤサア返答いさせ。返答せねを了簡あ
らぬと。肱をはらさる腹立上戸。まごゝきみをうらうらく
と。腹を抱るうらひ上戸。鼻飛をたぶ〳〵〳〵と。鼻を
おさへて泣すり。おほく〳〵たらていぞ〳〵ゆく。跡見を
くりて忠作を。ひきんでみても肝心の。あいてあけれ
ば詮方も。むーやくしや腹立そのところへ。茶見世の

下女も両手をつき。まをし〳〵いま別荘の奥さまが
さ。御立でござりまいと。聞て両人を酔も醒。おどてふ
ためき別荘へ。足をはやめていそぎゆく。

七段目　篠原老母之自害　同苗嫡子之初陣　老母隠宅の場

老馬も道をわするとうや。かくて篠原國幹が。母の微誠を義を守。我子よ逆心あることを。つきむることのおかしーぢ。氷へ霜をくごくく。用る色のみえざれな。をーからぬ身を隠家よ。むかーく月日をおくりけう。頃ーも春の山うを。包霞の縅て。庭の梢よ鶯のきて囀る法華経の。聲よくこの世のはうなさを。さとる佛間よ焚香の。煙のどうよ日の脚も。もや西山よかーさむくくろ。表よ美ふーき旅姿。年も三十路の女房盛。下郎の園六引連て。芝折戸ちうくと歩行より。たのみまーよと下郎ぢ案内。どなたさまやと老母もたちいで。ヤコレぢ珎ーや園六そちらよみやるも嫁女ドやあいう。イ母さまゑ。ひさぐまて。アコレ挨拶をゆるりつと。先くこれへと伴ば。會釈ーふがらお通り。コリヤ園六そなた用事もない。先へかへりやう。ハさやうあれば奥さまごめんくださりませと。一礼ー元来ー道へ引返す。あとうちみやり松ケ枝も。戚儀をあらため両手をつき。まづもうて母さまゑ。阿機嫌よくおもーますう。即朝夕の御不自由を。ぞんじあがらのござさと。おゆるーあ

されてくぎさりませと。頭を畳へすりつけれど。母も
うちゑみ。コレハ〳〵嫁女丁寧なその挨拶。そなたもぶト
よおくすろう。おり〳〵の文玉章。ねんごろな入筆。かゝ
ドけなふぞんじます。ソシテ孫の國太郎も。明暮息災で
るやろうの。されむでござりまん。夫國幹逆意を起し
母さまの御諫言も。つひよ用ひこのたびも。西郷殿を
大将とさゞめ。桐野池上別府殿。そのほか都合數百人。
先月三日より繰出し。いまもつて合戦最中。をうらら
悴國太郎。初陣したき望のおもむき。度〳〵まをしいで
なれど。はうらひがさきむねまをしきらせたれど。子

供心よおもひつめ。おうらな婆さまへちねごひまを
し。初陣の御許を蒙んと。まをしるられまさゆゑよ。
いまもこゝへまいるもしれず。よろしう願上ます
と。前後の始末のべけれど。老母の微誠忘ぐらくも。眉
を顰てゐなりしが。やう〳〵老のこゝろをはり。拙き悴よ
引換て。賢き孫の武勇心。さりとも賢いやうでもま
ざ子供。家を汚し名を穢す。逆賊無道とおもはずして。初
陣をのぞむとは。一をきゝて二をきらず。答の花をむ
ごらしふ散す不便さいとゞらしさ。嫁女推量しやいの
と。老の眼を咬しめて。忍涙をおさへくれおはする。かゝるおり

うら喧すく。耳をつらぬく石火矢也。天地よとゞろきすさまじく。くろ〴〵のぼる黒烟。空よたちまち一騎駈。駒よ一鞭大村源次。表口よ大音上。ヤア篠原公の奥方やおるするろ。昨朝より吉次峠よたむろせし。味方の軍勢いまゞ敵ハちうよらゞと。油断よういろの谷間より。ふつと起うし伏勢も。毒薬ちりみし大砲を。味方の里へ砲發され。思案工夫もあらばこそ。瞬あらば味方の軍卒。三千ばかり打倒され。すをやと見る間よ篠原公。毒よ哽しやうすあれな。拙者もやくもかしづきて。馬をすゝませ山を下。まぐらく休よそのうろへ。いろ〳〵あとを慕来て。あらされいでうる江田荘助。切てかゝるを心得て。うけつながづし虚ゝ實〳〵。勝負ハごかくよみえけるうろへ。颯とおうり〳〵水嵐よ。漆て飛くる二つ玉。躊躇ひまもあらけおや。篠原公の眉間へつらぬき。バヅト拙者も氣をそぶろ。介抱するまよ二太刀三太刀。切込れしが篠原公。痛手を屈せぬ氣丈のきつさき。つひよ相手を刺殺ど。深手よよろうる息づうひ。拙者めをちら〳〵めされ。コリヤこの太刀ハ先祖より。家よ傳ハる品あれむ。かならず敵へとさぬやう。その方これより我母

の隠居館へ持参りつゝ。もしや悴ゝ松ヶ枝が。ねあをすあらを手渡し。我欝憤を晴さんせよと。その一言が臨終と。きくより松ヶ枝身よそへ。胸を張裂操の涙。老母もきくより眼を閉。珠数を掴おくのかく。佛間をさして入跡を。みをくり〳〵松ヶ枝を。夫の形見の大太刀を。手よりあげてはら〳〵くさ。打守〳〵。遺恨の眼血を灑。太刀を鏡よ打向ひ。烈女の勢ものをごく。髪も逆立ぐさくさり。大村くるゝきいきをはり。ア、篠原公の遺言をたがへされバ。最早この世よのそみさあり。さりながらこゝにて空し

く死るを残念。これより敵地へ走せ向ひ。潔討死りさん奥方さらばといすてゝ刀を杖よたちあがり。駒よ跨り逸散よ。戦場さして出て行。おりからかほる春風や。駒の嘶蒼の小櫻。初陣出立花聲よ。篠原の一子國太郎。庭前へ立寄を見るより松ヶ枝くるをうけ。ヤレ國太郎ういさまし。サ、母がおろしてやろと。立寄て詞をあらさめ。イヤかなうずおかまひくださるなと國太郎ハ馬より下。ずつとやまをし母さま。婆さまハどちらよぞ。篠原國太郎御願のもぐあつて。参上つらまつりまし。御取次くださ

れよと。礼義たゞしく相述る。松ヶ枝ハ感入。ホゾ〳〵そこよまうてゐやと。いそ〳〵立て奥の間へ。いらんとすれバ胸騒。そうとみおくる。へざての一間。ぱつと立さる血烟よ。驚き障子押開ゐ。朱よ深うる姑を。いま限のありさまふ。松ヶ枝はゞめ國太郎。あそてかけよりとうをゞり。コハなにゆゑの御自害と。介抱おろか泣斗。手負をくるしき聲をはり。ヤレなげくまい嫁女。なにゆゑの自害とも。なさけあい慰勞言。忰國幹が逆心を。あらよめさそふ。なろうふ。これ此村へ引籠。淋き月日をおくるのも。一を家の名をおもみ。二を孫の可愛さゆゑ。なにとぞ智者よ育あげ。名譽をえさせ亡夫よ。孫の自慢をせんものと。老のたのしみの年月。花咲春をまつこゝろ。それよひきうへ此度を。忰のやうな悪人を。親とおもふて子心よ。初陣望孫の孝心。今朝を忰が討死し。いまゝ孫があのやうな。凛〳〵き姿を逆賊と。家名を穢のみあらず。名もなきものゝ筒先よ。むざんの最期をさせるうと。おもひまをせば片時も。世よ存生て老の身の。泪よ濕る香花を。ひとりなげめてゐられうう。コリヤ孫よ國太郎と。苦きこゑよ呼子鳥。そうとくも涙ぐみ。まをし婆さよ。かねて

あなさのおほせの通り。學問ま精出して。名を擧るの
が孝行と。よく合点してありますなれど。現在父の討
死をきゝてこのまゝ身をおゝみ。むゝくかくれてる
られまいやうも。婆さまの御心よ。そもくうそぞんじ
ませねど。こゝや初陣がきふござんす。かならず
叱てくださるなと。義を行守勇士の嫡子。かんばく
こそみえよけれ。松ケ枝をたゞ狼狽と。手負の背を撫
擦さまる老の身の臨終ぅ。次第くまよつゝはて。はか
なく息も絶果ぅ。ハアかなしやと松ケ枝ハ。老母の死
骸ま抱つき。前後ふかくま泣沈む。あげきを余所ま庭

前の。千草まもぐく共のくる。一度まやみしを怪やと。
みやる小栄のあなさよう。忍出立の田尻密。家来ひき
つれあらゝれいで。今宵のうちま篠原が。妻子のくら
ず生捕て。手柄ませんと黙頭合。きよろくうそく
うかゞふを。みるより手早國太郎。小腕のはさらきみ
せんずと。すらりと抜て切付るを。心得三人抜放し。う
けつはづつ上段下段。三人を相手ま國太郎。飛鳥の
ごとく駈めぐる。それとみるより松ケ枝も助太刀せ
んとたちあがう。承塵の長刀とるよとえしが。風ま
よさうふ燕のごとく。切てかゝれど三人ま。コハた

まらぢと。ひるむをつけこみまくしうけ。手もなく三人を切倒し。止を刺とするところへ。ヤレ出うされと御両所と。女のこゑも呼留られ。こなさも耳をそばだてゝ。暫躊躇そのところへ。西郷隆盛が妻の定子を先よたて。續ていでさる。桐野村田両士の妻。銘々長刀脇狹。襷ずゝくちらをれいで。定子ハこゑをはげまして。御両所のおてなみ天晴〳〵日外御評議まをせしとほり。これある銘々も必死をきそめさるれど。女隊を組立戦場へ出陣いざやうと勧れど。松ケ枝を手をつうへ。これをゝみおく〳〵さまをいうよふこそ御入来くだされまし〳〵と。夫國幹を今朝うちじにいたし。猶姑もつひよ自害をいさされこれど。不束あがらうとやう。ホヽさやうあれどみなさまのおほせみあさがび。これより戦場へおんともつかまつりまーやうコリヤ國太郎よ。ソレみなさまへ御挨拶をまをし。そのさきへ出陣ーやハツトばうよぼるこゝちして。勇立さる門出の笑顔。匂ふ若木の小櫻も。翌日の嵐よちるぞとゝ。神あらぬ身の露志らず。いづれもさらぞと一れし。駒よ跨りさんよ。見返も

せずいてゝゆく。みおくる母を嘻さよ。悲さうぶ老
母の死骸。涙片手よ押入へ。かくせどあまる魂魄を。あ
とよのこして松ヶ枝を。夫の形見大太刀を。さしも氣
強弓張の。月の光とゆろともよ。きらを〳〵と勇立。木
の葉口へと出て行。

八段目　女隊軍議之活潑　山間きく〳〵之討死　木の葉山女隊の場

空も弥生の若緑。木の葉がくれの杜鵑。はつねをはれ
どまだ寒き。谷間よ残る白妙の。雪踏分つ女武者。銘い
長刀脇狭。襷ゞしくうちつれて。瀧坪近くあゆみよ
り。松ヶ枝をすゝみいで。イヤまをしみおゝされよ
り高瀬口へむりひ。今宵のやみをさいわひよ。敵のう
しろへひそうよまもり。隙をうかゞい斬入で。勝利を
とるこそ必定とぞんじます。御用意あれよとたちあ
がるを。定子をおしとめ。ヤレはやまりたまふな松ヶ枝さよ。

たゝく〳〵。敵の油断をはかつてきりこむも、多勢よ少勢。こゝよ夜軍を進退不自由。勝利を浮ること覚束ふ。いろそれより味方よ組入。手筈をあそせ機會よ投じ。よせくる敵を狹打。無二無三よなぎたてゝ。敵の狼狽みるがごとし。いづれもいづれも軍議最中。白雲うごく峰傳。大の男を前後よひきうけ。二人をあひてよ一人の女丈夫。火花をちらし闘ありさま。さながら龍蛇の躍がごとく。緑の黒髪ふりみだし。胫もあらはよ數ヶ所の手疵。雪の肌よ血汐の紅。足元四度ろよきかゝるを。池邊吉十郎が妻の菊野。それとみるより定子ハこゝろうけ。ヤレまちかねーぞ菊野どの。いでや加勢をいさまんと。いよりはやく鉾ゝハ。長刀ふりてたちむかふ。菊野をなぎも勇立。苦もなく二人を切倒し。はじめてがつくりうち倒れ。既よ氣絶とみえけれど。定子ハたちより死活の息。菊野どのおくろたゝろよゆられよと。耳よ口寄声高く。戦場のやうすりけさまをうんと。呼をれバ。ハツとこゝろをとりなをし。ヲ、定子さよこれよござりまするか。ア、うれしやく。おそれながら水一口。ヲ、合點と松ケ枝ハ。手拭こゝろて瀧津瀬よ。ひたくて手負の口中へ。搾入れぐゝと呑

込。おきなをうて身繕。定子さゐのおさ〳〵づよきさが
ひ。巡礼姿みこの身をもて。此處よ顯彼處よ隠。たま
〳〵敵の筒先よ。むら〳〵だはやく大地よふし。からく
ものがれやう〳〵と。路を高瀬の山よりり。木影よもの
び身を堅め。軍の摸様を眺れば。鎮台歩兵数千万。木の
葉高瀬をとりかこみ。山鹿口よハ砲兵騎兵。九三十余
大隊。筒先揃て打出す弾丸。雨ろ霰ろ雷ろ。天地裏黒烟。
味方ハ風せず白刃をふるひ。たちまち敵の手元へ切
りこみ。あるをさいなぎなられば。敵ハ狼狽隊
伍をみだし。くづれうけるる歩兵隊。〳〵ろをみせて
にげいづすを。逃さじ遣じとせめよせ〳〵。味方の勝
利とみえけるところ〳〵。南の山てよせての隊長馬
上よたちて大音上。ヤアなにがしなどのこころある。抜刀隊
を繰出せと。号令かゝるとみえけるをうら〳〵。敵の内
より百人計。太刀抜かざし〳〵あらそれそ。喚き叫んで
なだれかゝりさま。修羅の街や血汐の海。その日のあら
ましかくばかりと。息継あへず物語。松ヶ枝ハ進よう
シテ〳〵大将はじめ桐野池上村田の面〳〵。生死いりみだ
たゞぬれバ。再両眼かろとひらき。かく〳〵乱軍なれど生
死のわどもも。たゞうよそれとうけたまはらねど。その

面くハ合戦半。田原坂へひきあげーと。風のたよりよきいくるばくり。只残念ハみづくらひくり。杖よーとみし太刀抜放しの木蔭よりイでみるところを。悔や敵よみつけられ。逃んとするまゐ駈来る。敵の若者数十人。それ生捕のがすなと。此身ひとつを追取巻。あやゐきとくろを死物狂。やうくく敵を切抜しが。心よまうせぬ数か所のて疵。すいりやうしてとばくりよて。眼血走る口惜涙。心をくんでゐみるる銘くも。ともよ涙よくれゐる時しも聞る馬足の音。ハテいぶうしやと銘くく身構。みやるむくみよ一騎がけ。男出立の女武者。眉見の太刀

疵血ハ濺津瀬。腰よ生首鉄砲を。小脇よかひくみ勇しく。砂を蹴飛し駈来れバ。松ケ枝くろけ。コレハ桐野さゐのおかのじ。梅子さゐお勇しや。イザこなさへと請すれで。梅子ハ馬よりさづくく下。一礼して打通り。定子よむくひ容をおくさめ。御覧のごとく自そ。男の姿よこの身をよそほひ。昨日より田原坂を徘徊し。合戦のもやうを見届されで。ゆるくおはなしまをしあげん。併あれよ見馴ぬ女。なたものでござりますと。訝れで。定子ハ片頬よゑみをふくみ。コレハシタリ梅子きゐ。まもりて彼をごぞんじでござりませぬか。日外夫隆

盛が媒を〳〵せし。池邊氏の妻でござりまする。ヤコハ
かねて利秋よりきゝおよびましさが。いまはじめて
の面會。みうけまするれば數ヶ所の手疵。いづれぞ
とあやしむ体。そもゝ松ケ枝うち志ゐれ。梅子さなお
きゝあそばせ。定子さゝの御差図ゆゑ只
ひとり。木の葉高瀬の戦場へむかひ。かくのごとり深
手を負。そても存命おぼつかなあし。推量くださりま
せと。泪に手の物語。きいて梅子もとも涙。ちぢに黙し
てゐたりける。哀を余所ゝ定子ハうるかけ。イヤまを
し梅子さゝ。各戦場へおもむくうへは。亡身のうへと

かねての覚悟。かやうなことゝよ卿猶豫あく。田原坂の
合戦。次第逐一おはなしくださりませと。問れて梅子
も心附。容をあらためかなをつて。されば三月十四日。
田原坂よ築ける。味方の塁へせめよする。先手の兵を
大坂鎮台。あとよつゞいて近衛兵。かねて味方を油断
あく。筒先そろへてうちおろす。急雨よひとしき弾丸
を。敵をくづして味方の塁へ。蟻のあつまるごとくよ
て。各〳〵土俵よ足をかけ。木傳猿笹蟹の。磐根を攀るあ
りさまよ。味方もそれと人數を撰み。或ハ大太刀槍長
刀。打揮〳〵ちむかひ。よせつけまじと必死を極。矢

石の間より戦へむ。天地一面黒烟。煙の中より剣の光。二百余人の抜刀隊。味方の塁のかなたより。不意よりあらん切込振舞暴風烈火のおもむきなり。人間業ともみえざりける。味方もさるよし周章狼狽。防兼て数十名。枕をならべて打斃。残る味方の面々も。度をうしなふて逃げ去る。残念あらん味方の塁も。敵のために乗取れ。自もをの一騎。これまでと討手をひきうけて。手疵少々負ふ。それども。負軍の腹いせよ。此首一つ持参せりと。一部始終を物語。きくより面々いろをあらため。髪もさか立ぢりなり。そば

より卽ち手負の菊野。むつくとおきて顔ふりあげ。大将はじめ村田逸見桐野様。次より吾夫吉十郎。いづれも怪我をござりませぬ。サレバその方々ハ。はやく味方の敗北をさとり。川尻の本営へ引取。軍議最中とうけたまはる。アヽうれしや去なから。此世のおいとまごい。まをし定子さぬ皆さぬの手前。はづかしやあがら。今端のきそ一のおねがひ。抔も吉十郎とござるが中。死ぬ一所と云替へ。慥ろ中もまいならぬ。人目の関より。へぶてられ。偶の逢瀬もなるく。帯さへとらぬ妹背中。西郷様のおなさけより。晴て

やう〳〵女夫となり。やれ〳〵やとおもひしも。たゞ一夜の春の夢。袂よ残る移香を。つゞめて過し昨日今日。無惨や敵の太刀風よ。散て行身のこの黒髪。慮外あぐら定子さま。夫吉十郎よ御會のせう。お届あされてくださりませと。いふも苦しき断末魔。掌を合するやうの緒の。きれてはらはらく息絶さう。定子をつゞめ並居る女丈夫。手向の唱名繰返し。なげきよ時の移るまで。定子ハ俄よ太刀引抜。菊野の黒髪きりはらし。弓手よ握て立あがり。ヤア〳〵各〳〵最早日も西山よ傾バいそぎ味方よ組入て。合戦のまゝ配いさんと。呼されバ。

さうと一同愁を拂ひ。いざ出陣と勇さう。向よ敵地いく劔の山。残る菊野ハ浄土の花無常の風よ散失る。木の兼を跡よ入相の。鐘の音踏で出て行。

九段目　實子恩愛之断腸　老父後悔之切腹　囚人忠作詮議の場

既ま日も暮遠近よ。燃る篝火焔々と。天地ま映ド野も山も。さながら昼のごとくなりう。立帰る戸村藏人。跡まつづいて有田賢助。各〻席ま着けれバ。田中幸藏ま。みいで。昨日西郷隆盛の家来。忠作とうまをす老人を巡行の巡査生捕て。先刻これへつれまゐりしゆゑ。縄付のまゝ留置ましてござりまする。如何はうらひよーやうやと。まを〻出れば戸村藏人。ナニ西郷の家来を生捕とな。はやくくこれへ引摺出せ。吾等嚴く詮議を

なゝ。隆盛の在家白状させん。ノウ有田氏。いうまも詮議の手掛まハ幸の獲物。さりまをまゝこれバ囚人ま老体とお随分いつそう縄付のまゝ。これへ引出ーてよかろう。ハヽトそこへて田中幸藏。獄屋のかゝへのそぎゆく。哀ある〻老の身の。背ま荒縄の菱の紋羊のあゆみやうを越〻くと。白洲まこそ押直る。戸村藏人ぎろりとみて。其方が隆盛の下郎とお。コリヤそのそうが主人西郷隆盛。せんそうよう跡をくらまし。影武者のその官軍の。あざむかれーく数へがゝ。このたび其方を生捕

ーを幸ひ。隆盛の在家サア真直ま白状いさせ。ハイ〳〵主人隆盛をさる二月川尻の本営へおもむうれまして。その後一向行衛ちれず。又妻子もちうぐはあれぐ。なにとぞ主人のゆくゑをと。捜ー廻つてみる最中。今日のこの御吟味。主人の在家ちらぬが真実。いまさらあんとまをーあげやうもござりませぬ。何卒おなさけよ。命ぞうり小御助なされてぞゐうりける。戸村藏人うゑあらーげ。ャアぬうーうり者め。背筋を断割熱湯を滝でなうと。白状なさせでおくべきう。ドリヤ拙者が手料理ふるまうんと。ち

ちあぐるを有田賢助。ちぐーとそぐめ。アヽコレ戸村氏手荒くとな。おやめなされ。彼ハ老体もし落命いうーし。詮議のまかりをうーなそぐ。貴殿ハいうぐなされな。サアくと。つめうけられ。流石の戸村言句もいでず。面膨ーてみうりける。有田賢助こゝを和げ。ヤナニ戸村氏。はぐうりあぐら此囚人の糺問を。拙者へおまかせくぐされさー。貴殿ヨハこのばの模様。隊長へ御届くぐされと。いくどの糺問嚴重でもござらうが。もし白状せぬそのときハテ入ざるごわん。貴殿へ御迷惑ハかけまをさぬ。

然バ有田氏。どうなりと御勝手次第よなされよ。この藏人をこのやうな。不快の席よハごめんをかうむる。ドリヤ御暇まをさん。いざ有田氏まうバ戸村氏明日御目よかゝらんと。互の挨拶戸村藏人。本営さして出てゆく。跡みおくりて有田賢助。なにおめひけんたち上り。忠作の側へさゝよりて。コリヤ忠作ハイさぞ窮屈であらうなあ。縄ひきときつるすほどよ。隆盛の在家この賢助よきりせいと。いゝつゝ立て荒縄を。ひきく拍子よ上衣ハぬげ。下の胴衣ハみおぼえある。吾血をわけし幼児よ。着て捨てる鹿の子の小袖。コハそ

もいつたと氣ハそゞろ。怪む体を氣どられじ。悟れまじと。えの座よ。かゝつてあばなく。たゞ茫然なるばかりなり。忠作ひそうよ思よやう。先程より何くれと。情をふくみし有田の振舞。そよ面ざしその容貌。のゝやと心動かど。只ならぬ顔を見結ある。やうそよ此方も。詞をやそらげ。コリヤ忠作そのそうよあらためて。尋問なき子細もあれど。其儀ハ先追てのそと。先刻よりまをすま通り。隆盛の在家きみやうよ白状いくせ。どうじやくゝ。ハゝ先ほどよりまをしあげまもるそうり。主人のゆくゑを尋まもる

最中なれど。私がぞんじてゐるまづいござりませぬ。
生中この世をなげうふる。ゆゑよさまざまの憂艱難。七
十よちうき此命。命を惜む卑怯者と。おぼしめすうた
ぐんじませねと。命ををしむ其譯を。おきゝなされて
くださりませ。私ゐはなつさ一人の悴がござりまし
て。二の年女房が背負。ある方へ行途中。悪者よ出逢女
房ハ切殺され。幼児なくり悉あく。不幸の中の幸と。一
且抱てかへれども。男の手一つでそだてもあらず。僅の
品を賣代あし。金子をくりのへその外よ。吾家の重宝
頼國光の守刀を。悴へさゝそへ乳ある夫婦へあづけ
まゐらせ。その夫婦をちも悴をかゝへ。いろくへう出
奔。指を折て数ふれど。今年で丁度三十二年。悴の生立
ゆくへまで一向さらず。老るよあさがひ目ハかす
み。腰を弓張氣を弱り。頻よ悴がこいしうあり。せめて
此世で今一度。我子よあいさいと。おもふ計が親
の煩悩。御前さまも親子があるものじやと思召。御推量なされてくださりませと。
涙とともよ語よそ。有田が胸ヨひしぐとさも。浮世の義理
誠の父上う。なうくさよといよへぶてられ。眦眼よ泪をうるめ。忍ねて顔そむき。

腸を断男泣。忠作もまさ泪をうるめ。イヤまをし先刻
よりおなさけまあまん。失礼をまをしまするも。心の
迷ひ煩悩ぢ。御前様のお顔むせ。目元ゟ鼻筋あら。殺
れさ女房ま生写し。いよいよとお前様の守刀ハ。頼國光
のさくまして。金無垢で狂獅子め。目貫でハござりま
せぬゃと星を指れし一言ま。賢助今そこへかね。親
父のそばへ走より。父上様おゆるなされてくださ
りませ。何をゥ色ん私ま。御捜しくださる御前の悴で
ござりまする。これ此守刀ぐ親子の証據。父上様おな
つらしうござりまし。嬉泪ぁくれけまバ。忠作も

愛着の心一図ま。ヲ、悴あひさかつさし。逢さかう
さいやいと。たゞひま膝を摺よせて。顔打守ぐり
あり。やゝあつて有田賢助。容を改め両手をつき。是ま
で年月遂ま一度の音信さへ。おこさつて暮せし不孝
のだんま。御免くださりませ。夫ま付て訝き一事あ
り。先刻父上の縄めを解しそのをりゟ。御胴衣ま
されし鹿の子の小袖。かねて私ま見覚ある品。いろ
ゞのつけまて父上の。御下衣とハあされしぞと。問れ
て忠作目を忘ぐき。ヲ、この下衣のつみかの。いよ
も哀ぁ物語。いまより丁度七年前。西郷殿の門前ま。お

ぎやあ〳〵と捨子の泣声。拾あげてよくみれば。美い女の子。直よその名を繁とつけ。牛乳そうてそだてよと。此爺よ命ぜられ。それより毎夜抱寝して。まかくるおど可愛さ勝り。背丈延るよ〳〵がつて。子供よ似合ぬ利発の質。この爺をなぐさめてこの鹿の子の小袖をとりいだし。お嬢のまづらさいゆゑ。肌よ着込でおされども主人隆盛が出陣のその砌。奥方よいよ〳〵よわ。お嬢が実父ハ今度討手の一人。この隆盛と縁組でも。娘の愛よ引されて。向ふ剣も鈍であろと。義をたてお嬢を離縁の沙汰。幼心の健氣よも。それをかなしみ自害して。死やつさいのと。聞て驚く有田賢助。スリヤ西郷殿かくまでよ義心をたてゝのおがしめし。ハヽ〳〵勿体ゐや冥加ゐやと。五臓六腑を絞あげ。身を悶ろる後悔泪。忠作そへまりよつて。合点のゆゝぬ今の一言。スリヤあの嬢とその方が。サア現在娘でござりますといと。聞て忠作あきれ顔。ちむし〳〵こと〳〵ばもゐ〳〵ず。稍あつて小声よあり。スリヤその方が若氣の〳〵。内証の情よ胤をやどし。その上のことであろ。去ゐがら爺がためよ現在の孫。おもへば〳〵悪縁と。さしうつふいてゐる〳〵ず。コレ忰三十

年目ヨ廻あいし。其方への餞別。心ヨ腚と記臆せよ。西郷隆盛の潜伏を。岩崎谷の坑の内。桐野村田の面々と。共ひそんでおもるぞと。聞より賢助両手をつき。コハありがたしと一礼す。隙をうかゞひ忠作を。有合國光の。短刀引抜我とヲ腹よぐっとつき立れバ。コハなにゆゑと有田賢助。利手よとりつき抱よせ。ヱヽなさけあいことなされまするなあと。泪ぐらヨ介抱す。忠作苦しき目を見開き。不忠を罰立るこの切腹なにゆゑとヱヽきこえぬぞや。たゝひ我身を八裂ヨ。遭とも言ぶとけつしてゝ主人の隠家。我子ヨま柄をえさせさせさ。忠義をヲそれ浅ゝしく。告て自作ろ罪。ホんと存生るらんぞ。コレく悴くの白髪首を。はやく官軍へ持参せよと。死る今端のきよヨ愛着の。心をさつしく有田賢助。恩愛の涙ならく。みぐれて落る薩摩潟。浪打かくすごとくなりかるなげきの其所へ。駒ヨ一鞭戸村蔵人。駈来てこそだろヨ。ヤア有田氏かねての囚人いづくなくされと。荒ゝしく呼ろヨぞ。いまもの忠作顔振あげ。ヱヽ未練なぞや悴。サヽもやく介措ゝてくれと。迫かけられ有田賢助。ハット答て立上り。口ヨ唱名眼を閉。鬼ヨおつてと抜放

す。剣の下や忠作の。首ハ前よぞおちよける。有田賢助
くゑ張上。ヤアくたれゝあるゝ。囚人の死骸くりおけよと。
呼ゝろこゝろよ。戸村藏人。會釈もおく打通り。こゝく有田
氏。遂よ囚人を殺されーよお。シテ隆盛の在家をいゝ
でござる。サレバ嚴重よ詰問いゝー。終よ白状いゝさせ
まーさ。然ゝ上ハゝゝ下郎の囚人。免やらんと存ぜ
ーゞ。彼も賊の一類あれむ。拙者がまてよかけまーてご
ざる。深夜あれど拙者ハゝされよう。本営へまゝりこー。
賊将らゞ隠所言上いゝさん。ヤアく者共賢助の乗馬用
意いゝせと。呼ゝりつ。白髪の首を抱あげ。泣ぬ顔す
る浮世の表。心の裏ハ西方の。弥陀の浄土へ野邊おく
り。首途の火焚を彼處の篝火。ゝゝらむ戸村氏。イヤナニお
搆ふく有田氏。さやうあれでごめんくござされと。礼義
みぶさぬ有田賢助。駒よ紛披と打跨。本営さして急行。

十段目　官軍寛恕之説諭　逆徒畳中評定の場

昨日まで。猛りまくりし賊軍も。今日ははうなく打敗れ。街は繁き石火矢も。遂よ途断て遠近の。篝火さへも影薄く。次第ふける秋の夜の。いと物凄みえわけり。隆盛もたゞ茫然と。手を拱て待折柄。使者よむうひし山野田一輔。息を切て駈来れば。隆盛みるよりこゑをかけ。こゝい山野田氏御苦労千万。シテ官軍の返答いかゞでござると尋れば。山野田ハット容をあらため。されど御指図もとづき。河村参軍よ對面いたし。彼の旨を尋問せし處。河村参軍ゑみをふくんでまをすやう。今更汝等征討の理由をたゞぬるとて何事ぞ。かゝるのことのもとらざる隆盛ならず。然れどもその道理はげしくとあらば。尚一通りをきゝ給へ。謹んでうけたまはれ。譬隆盛陸軍大将たりといへども。一旦職を辞しいまだ退隠の身分。よし政府へ尋問のことあるも。私よ兵を引抔を。穏當あらず。畢竟治安を害するの罪まぬかれがたし。殊よ隆盛等よ属する者共。或ハ暴動或ハ掠奪。あまつさへほしひまゝよ紙幣をつくり。政府を蔑如し。宸襟をなやめ奉るところの罪人。

風よ賊徒の名をくゞし。征討の命えもとより至當なり。さそさりあがら其罪を憎でその人を憎まずと。鋭き眼よ涙をうめ。声曇〳〵て又いふやう。茲よ一言隆盛よつゝなきことあり。抑も我と隆盛とを竹馬の友。幼き時より水魚のちなるみ。親情亘よ浅からず。然よこのたびの一擧よおよびしを。我實よ歎息の情よたへず。就中先日擒よせし隆盛が家族。それらがことをおもふ。たとへ隆盛丈夫といへども。朝夕な愛著の情想やる。その家族らが處置よおひてを。この純義深おもふところあり。悪やうよを計ふまじ。是等の愛情よ心をのことさず。男子よろしく意をけつし。潔よく討死するろ。将よ官軍へ降参するろ。明日午前五時を期し。かならず返答いふすやう。此旨かく〳〵つて隆盛よ告られよと。かくの通りよさうらふと。息次あへず述けれた。隆盛も眼を開。ちゞしもあるべし〳〵さうあがら。五時といふてもう二時間。ヤア〳〵各。明日の軍略評定せんと呼をれバ。桐野、村田、逸見、別府、岩元、池邊うちつれて。おの〳〵席よつきけれた。隆盛諸士よういちむうひ。如何よおの〳〵。只今山野田氏の物語。さゞめておきし〳〵あられし〳〵ふらん。是よう

諸君の御意見をうけたまはり。血戦を試も。又官軍へ降参もるも。拙者よおいてもを拒まねど。おの〳〵決断のうへ。軍器をとりまをさんと述けれむ。村田新八進出で。我〳〵これまで憤激の餘。志を一時よ達せんとはかりしよ。天運すでよかく迫れり。今更何をう躊躇べき。潔血戦いざ〳〵。義烈の名を後世よのこさんと。忽みを含て述けれむ。池上四郎詞をつぎ。今度事を企しも。人情やむをえざるところ。何ぞ今更順逆邪正をろんぜんや。人間九順と云ども逆といふも。畢竟戦争の勝敗よあり。我〳〵賊とよをるとも敢て患るよ足ず。

今更あきつらを抱へ。何官軍へくだらんや。我尸を山野よ曝し。禽獣の腹よ葬ることを英雄の覚悟。死をけつして戦んと。手疵を屈せぬ丈夫の決断。桐野利秋横手をうち。諸君いづれも潔き御英断。いさまし〳〵。拙者おどろかねての覚悟。平生鍛錬し剣の手前。何ぞ卑怯の振舞をなさん潔く敵の将帥と刺違。さいごのみちづれよいざさんと。髯揉あげていさむ。逆見、別府岩元も。おの〳〵同意と異口同音。きいてようこぶ西郷隆盛。莞尓とゑらみて一坐を見廻し。かねて誓ひし協力同心。この期よのぞんでへんぜぬを。天晴あ

る精神。我身ながらうて満足く。これおもふところあつて。この度事をあげうるも。不幸微運ゆえして敗北し。已ま討死の期をせまれども。何ぞ今更限ある此身を惜み。官軍ま降らんや。諸君とともま潔く義烈ま死なん。ちうちむ此所まなみみる面ろまえ。いづれも討死の用意いそがれよ。その他の面ろを随意まかをべしと。ろゑはうあげて呼ばれむ。末座まひろくく吉十郎。隆盛の前ま進み出。只今おの〳〵。御決定のおもむきを傳んため。拙者これより官軍へ使者ままいらん。ちうるうへを明朝の戦場おいとまくださされさし。斯まをすも餘の義まあらば。先頃井妻木の葉山まおいて討死の節。貴殿の奥方より御介抱を蒙り。それのみあらず。遺髪まで御心配くださされ。おものひまをせバ是まで重ゝ貴殿の御厚志。今生まおいて何をもつてうか報ずべき。せめて御先途をみとゞけ。且御家族方の御成行。およびふがら拙者めが身のおよぶまで忠義を盡さん。ふにとぞあーかうらびおぼしめし。御聞入くださされよと。言も涙まま声曇。ろれが此世の見納と。両手を膝まつくくと。顔打守バ西郷隆盛。流石丈夫も愛と義の。情まま迫てはら〳〵涙。志のびうねうる風情ま

り。隆盛涙を押拭。コレハく池邊氏。よくこそおもひつゝれたり。然ではやく此場を去。善よとばかり詞數。言ぬを言よ弥増。すつくとたつて吉十郎。並居る諸士よ黙礼し。心を残していそぎ行。折柄響合図の鉄砲。桐野、池上岩元逸見、別府、村田、も身繕。イザ西郷殿戦場へ出発いざさんと。誓ひよそむかぬ一味の勇士。ドリヤ潔く討死せんと。立上西郷隆盛。翌日をかぎりよ世を秋の。草葉の露と諸共よ。消よ行身ぞあはれなり。

十一段目

岩崎谷間之緑苔　逆徒滅後之紅血　賊将討死の場

暁の。空よひらめく日の丸の。旗押立て城山へ。雲霞のごとく群集り。嶮き嶺より打下す。鉄砲玉も霰のごとし。岩崎谷の賊軍も。いまな防がんやうもおくおのく顔をみあはせて只茫然とるばかりあり。斯て有田賢助よ。獨抜出身ハ徒士立。鉄砲引提山を下。岩崎谷の林間よ。おぢ〳〵行み獨言。思ひまをせぬ父上ハ。吾よ柄をとらせさせ。忠義を忘隆盛の在家を吾よ言明し。それを悔で御切腹。御心根のもうさいあさ。をとへ恩ある

隆盛とて。人まよかけてハ亡父の。志をむよまもる道理。
恩を仇よて報ずる諺。ゆるしてくださん隆盛殿と。両
手を合伏拝。鬼よおつてと紅葉の蔭。まつとそ志らぬ
西郷隆盛諸士めも〳〵め是非なくも。駕よゆられて
来かゝれな。最是までと有田賢助。狙を定め撞と打。響
とともよ誤さず。駕の内ふる隆盛の。腹より腰へ貫い
とう。隆盛すゝさず用意の小銃。手早くとつて打返す。
狙ハそれず眉見よ貫き。ウーンとぞ有田賢助。虚
空を拄んで死してんげり。斯ところへ駈来る晋助父と
驚き隆盛の。傍へ立より介抱す。流石剛氣の隆盛も。急

所の痛手よ顔色変う。くるしき息をホット吹。ナヨ、口惜
やなあ。事をおこせし其日より。今日までの艱難辛苦。
敗北すれバ討死と。かねて覚悟の身なれども。花ぐ敷
勝負も遂ず。むふしく此所ではてる残念。いまこそ思
當され。この春船よ眠しとき。我亡友の月照ぎ。夢よあ
らわれ厳敷諫言。聞入ざりしを我誤。つまさら悔るも
せんなけれども。此度の戦ひよ。命を捨し無智の民。不
便の者やとばかりよて。己が手疵を苦よもせず。腸を
断仁者の涙。別府晋助詞をはげまし。御歎あるな西郷
殿。はやく〳〵塁中へいつて御養生。いざさせたまへとを

いむれぞ。隆盛おろりとうちみやう。イヤ〳〵そもたを
からぬ急呼の深手。御名残惜や別府氏。長苦痛を
すもせんふ〳〵。悼むがう御介措。たのむといふも断末
魔。ハツトそさへて別府晋助。立上〳〵が今更よ。おさけな
や無惨やと。顔差覗き涙をうるめ。ちだ〳〵行居るうけ
る。折うら聞ゆる喇叭の音。今端の隆盛こゑあらゝげ。
アレく敵はよせるぞや。時を移して我首を。敵へてさす
な味方の耻辱。サヽ切放〳〵此首を。向ふの溝へ埋めて
くぐされと。せきたてられて別府晋助。モウこれまで
と立上り。御覚悟あれと振上る。剣の光隆盛の。首ハ前

よそ落よけり。涙を拭別府晋助。曇〳〵声をはりあげて。
ヤアく味方の面々。大将西郷隆盛殿。たゞいまこゝよ相果さり。追腹せんとおもひふバ。早くくられへ来られよ
と。呼ぶる声よ驚く桐野。逸見、池上、村田、の面々。バラ〳〵
と集れバ。別府晋助大将の。首を擎へて一座よむらひ。
おの〳〵いろ〳〵ぞんぜるぞ。苦楽をともなと誓くる。大
将の運命もまでまかくの仕合。もとや拙者そのぞみ
ふ〳〵。さうふがら此首ハ。大将の遺言ふれバ。彼処の溝よ葬らんと。首を抱いて立上
れゝ。見をくる諸士も詞をそろへ。運命つきし今月今

日。大将の追腹せん。いづれもさらぬと太刀抜放し。腹
よ突こみひきまもせバ。浪じのめと別府晋助。立戻て
ぐっうとざし。そもよ双を差貫き。管の鎖を掻切て。か
つぱと伏や此世の名残。正ハ全く邪を。つひよ滅をる
天の道。天まこおー人をして。岩崎谷の苔の下。かくふ
る身こそ是非なけれ。

十二段目　城山古跡之残月　南洲書窗之奇夢　西郷隆盛夢の場

程もあらせず城山より。岩崎谷へ繰込官軍。威風堂〳〵
行列の。喇叭の音もいさましく紅葉の林よ日の
丸の旗翻ー粛然と。歩兵を前後よ騎兵隊。中よ一際河
村参軍。馬をとゞめて傍をゑまをし。ハヽア珠玉ハ砕け
易しと。暫しー愁よ沈しゞ。ヤア〳〵者ども。賊将らが死骸そ
こつふく。急ぎ城山へはこばれよ。實検よ供ん。いざ引
とれと號令の。こゑやをちまち隆盛を。ふつと目覚し
おきあがり。怪や今のを夢であつさうと。眺入ゐる庭

の面。羽叩鶏も打連て。東天光と唄ふ御代。逆巻浪も鎮まりつ。有明月の影留て。こゝ名やさゞ〳〵き竹本の。一節そへて千代八千代。世を演劇の有様ハ。虚と實の二瀬川水の流と人の身の。善惡邪正教艸。高天ケ原の短夜よむもべる夢を長文ゝ。記て茲ゟのこ〳〵けり。

逆巻浪夢の夜嵐 終

明治二十一年三月 日印刷
仝 年同月 日出版

東京日本橋區本町三丁目十七番地
原亮三郎

東京日本橋區本町三丁目十七番地
關幸吉

大阪北久宝寺町四丁目
金港堂原亮三郎支店

岐阜仙臺
金港堂支店

各府縣下代理大賣捌所

印刷者

發行者

大賣捌所

賣捌所

010190508884